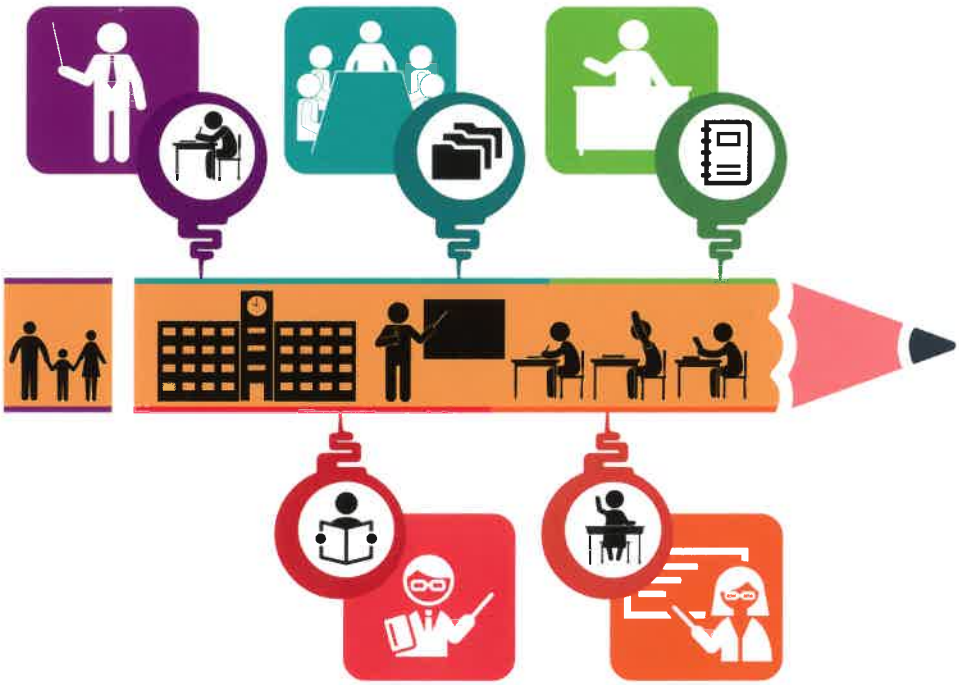
「社会に開かれた教育課程」を実現する学校づくり

具体化のためのテーマ別実践事例15

貝ノ瀬 滋［監修］
稲井 達也・伊東 哲・吉田 和夫［編著］



環境とかかわる

ESD（持続可能な開発のための教育）

11 地域に学び、地域を愛し、地域とともに生きる児童の育成

群馬・藤岡市立北中学校　教諭（前・藤岡市立小野小学校）　小西啓吾

1 実践のねらい

(1) 藤岡市立小野小学校での実践について

藤岡市では、学校・地域・教育委員会が連携し、コミュニティ・スクールの推進を基盤とする小中一貫教育の充実により、「笑顔、やる気、希望に満ちた子どもたち」の育成を図っている。「小中一貫教育」では、たてのつながり（小学校と中学校）とよこのつながり（学校と地域）を生かして、未来を担うための資質・能力、すなわち「生きる力」を児童に身に付けさせることを目指している。

こうした中、藤岡市立「小野」連携型小中一貫教育では、市内各地の郷土の歴史や人物、文化等について学ぶ「高山社学」や「英語力向上」に取り組んでいる。つまりこれらを主軸に、地域に愛着と誇りをもち、社会や世界に広く目を向けることができる子どもを育てることと、自分と異なる文化をもつ外国人とつながる力を育てることを目的とし、地域社会や世界で活躍する児童を育成することを目指している。

そのため、各教科等で身に付けた知識と技能を活用、発揮することができる教科横断的・総合的な学びを行っていくこととともに、具体的な活動や体験（地域素材を活用した学習、地域行事への参加・参画等）を通して学んでいくことを大切にしている。

この考えのもと小野小学校では、2017年度にユネスコスクール（ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校）に加盟し、アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト（以下、アートマイル）に参加したことをきっかけとして、総合的な学習の時間の目標や目指す資質・能力、学習内容を持続可能な開発のための教育（以下、ESD）の視点で再構成を行った。ESDは「持続可能な社会の構築」が最終目的だが、目的の達成に向けてのアプローチは様々であってよいというのがESDの考え方である。そのため、これまで学校

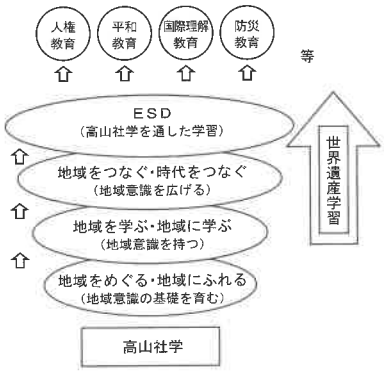


図1　ESDと学習内容との関係

で取り組んできた地域学習や世界遺産学習をさらに進めることで、地域への関心を高め、愛着を生み、持続可能な社会を構築することにつながると考える（図1）。

(2) ESD（持続可能な開発のための教育）について

ESDは、地球規模の課題を自分のこととして捉え、身近なところから取り組むことにより、課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動である。ESDは、ユネスコ（UNESCO：国際連合教育科学文化機関）が中心となり、ユネスコスクールを推進拠点として位置付け、世界中で取り組まれている。

(3) アートマイル（アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト）について

海外校と長期間継続して共通の学習テーマについてICT機器を活用し、スカイプ等のインターネットを介して協働的に学び合い、学習の成果として1枚の壁画（縦1.5m、横3.6mの大型壁画）を共同制作する「国際協働学習」の学習プログラムである（図2）。このプロジェクトでは、世界の同世代と協働することにより、学校で育てたい資質・能力及び態度を、世界を意識した広い視点で育てることができ、グローバルな21世紀の国際社会で、世界に開く広い視野を持ち、世界の人々と協働して持続発展可能な社会を築いていく力である「21世紀を生き抜く力」に高めることができる。

図2　共同制作した壁画

(4) 小野小学校の総合的な学習の時間とアートマイルとのつながり

今までの地域学習を海外校との国際協働学習に拡げることにより、探究的な学習をさらに深めることができる。地域での探究的な学習は、世界に伝えたい相手がいることで新たな視点で自分たちのことを見直し、世界を意識した広い視野で課題を捉え直すことができる。また、海外校とお互いに地域や国の文化を伝え合うことで、児童は自分の地域や日本に誇りを持つようになり、世界の同世代と1枚の壁画を共同制作することで、文化的な背景も価値観も異なる世界の人々と協働して何かをすることができるという「自信」を生む。このように、総合的な学習の時間でアートマイルに取り組むことで、児童は世界を身近に感じ、世界に開く広い視野で「自分の生き方」を考えるようになる。

2 主な内容

(1) 藤岡市立「小野」連携型小中一貫校教育

藤岡市立小野小学校は、地域の小・中学校が1校ずつという特徴を生かした「連携型小中一貫校」として、「夢に向かってかがやく子の育成」を小中一貫校としての教育目標と

して掲げ、9年間のつながりのある教育活動を展開している。「高山社学」を通じた地域理解と郷土愛の育成、伝統と文化の継承についても、総合的な学習の時間や各教科で関連付けながら9年間で学ぶ。

(2) 高山社学について

郷土を誇りに思い、郷土を愛する児童生徒を育成するために、世界文化遺産である高山社跡を学習素材として活用し、各教科等の学習内容と関連させ、高山社にかかわる学習だけでなく、市内各地の郷土の歴史や人物、文化等について学ぶ学習である。

(3) 小野地区の特色

本校校区は、明治初期に蚕種生産量が県内5位になるなど養蚕の盛んな地域であった。現在も天窓を持つ養蚕農家が多く残り、祖父母宅が養蚕農家であったと話す児童も多い。高山社のあった当時は校区内に分教場もあり、特に縫島(ぬいじま)家は立派な養蚕建築を今に残している。また、高津仲次郎ら優れた指導者も活躍し、校区内には碑が残っている。

一方で、本校校区は「小野地区水田遺跡」に代表されるように、古代から市内有数の水田地帯でもある。古代から中村ぜきが地域を通り、1800年代の泉通寺孝順和尚が中村ぜきの暗きょの改修を手掛けてからというもの、さらに水田の面積は広がった。土地が平らで、川が近くに流れるという土地の特色を有効活用していることがうかがえる。

そのため本校では、総合的な学習の時間を中心に、地域学習や世界遺産学習などの実践を行っている。この実践では高山社、養蚕とのつながりだけでなく、地域の特色に目を向け、その歴史や文化的価値を学ぶことで、地域の特色やよさに気付き、地域を愛し、地域の発展のために尽くそうとする児童の育成を目指している。

3 活動の実際

(1) 地域の特色に目を向けた地域学習と高山社学を中心とした世界遺産学習の内容

①低学年「地域をめぐる　地域にふれる」

小野地域の1年間を通した生き物や草木の移り変わり、周辺施設をめぐっての小野地域の良さに気付く。

②中学年「地域をまなぶ　地域にまなぶ」

自分たちの郷土は広大な土地や水のある豊かな地であること、そこには平らな土地を活用した水田開発や養蚕等の産業が盛んであったこと、郷土やこの地に住む人々のために知恵を出し合い、苦労や努力を重ねた人々がいたことなどを学び、自分たちにできることを考えていく。

③高学年「地域をつなぐ　時代をつなぐ」

今までの学習を生かして、小野地区、藤岡市、群馬県の特色を他の地域と比べ、客観的に見たり、地域のよさを「群馬のたからもの」として捉え、自分たちに何ができるかを考えさ

せ、取り組ませたりする。これらの活動を通して、地域のよさを再認識し、郷土を誇りに思い大切にする心情を育てていく。

(2) 6年生での実践

①単元名 「伝えよう　群馬のたからもの」(第6学年・1～3学期)

②本単元について

児童は、これまでの総合的な学習の時間や社会科の学習を通して、藤岡市や群馬県についての地域学習を行ってきている。6年生社会科においても、藤岡市の高山社と関連のある世界遺産である「富岡製糸場と絹産業遺産群」について現地調査を行い、自分たちの暮らしている地域について理解を深めてきた。

そこで本単元では、本校がユネスコスクールに加盟したことを鑑み、「アートマイル」に参加し、今まで学んできた地域学習の成果を「群馬のたからもの」として、海外の児童に伝える活動を行う。このプロジェクトでは、海外の相手校（今回は、台湾の嘉儀(かぎ)県の小学校）とのテレビ会議システムを利用した「ライブ交流」やネット上の掲示板である「フォーラム」を通して、互いの地域について紹介し合うなどの国際協働学習を行い、相手の暮らしている地域への理解や自分たちが暮らす群馬に対する理解を深めていく。また、相手が暮らしている地域についても同じように調べ学習を行い、自分の暮らす地域と比較することで、地元群馬への愛着や誇りを一層深め、自己の生き方を見つめ直すことができる。

③実施教科・時間数について

	教　科	単　元　名	時間数
アートマイルに関連した実施教科時間数	総合的な学習の時間	伝えよう　群馬のたからもの	35
	国語	町のよさを伝えるパンフレットを作ろう	12
	英語	自己紹介、地域紹介をしよう	2
	図画工作	伝えよう　すてきなふるさと	16
	社会	世界の未来と日本の役割	1

④主な活動の流れ

場面	時期	活　動　内　容	児童の反応	教科等
事前学習	4～8月	・今までの地域学習を生かし、今後の学習について見通しをもつ。 ・群馬の特色やよさについて調べる。 ・群馬のよさを伝えるためのパンフレットを作成する。 ・英語で地域紹介ができるように、カードを作成する。(表	・群馬の魅力を伝えるための方法について意欲的に考えていた。 ・海外の子供たちに群馬の特色やよさを伝えることに、「本当にできるのかと」いう不安な気持ちもあるようだったが、「やってみたい」という声が多かった。	総合 国語

		面は写真やイラスト、裏面は３行ほどの日本語と英語の説明） ・嘉義の特徴やよさについて調べ、ノートにまとめる。（夏休み中の宿題）	・今までの学習を生かすことや、さらに調べることで、群馬の特色やよさについて再認識することができた。 ・群馬の魅力を英語で表現できることに喜びを感じていた。 ・海外の相手校が決定し、パートナーの暮らす地域について興味を持って調べることができた。	英語 社会
出会い	９月	・スカイプによる１回目の交流。 ・１対１で自己紹介を行う。 ・嘉義の特徴やよさについて調べ、カードにまとめる。	・パートナーとの１対１でやりとりがあったため、緊張している様子だった。自己紹介を終え、海外の子供たちを身近な存在に感じていた。 ・相手校の学校紹介を聞いて、台湾の学校に興味をもった。	英語 総合
共有	10月	・スカイプによる２回目の交流。 ・お互いの地域を紹介する。 ・群馬と嘉義の特色やよさを比べて、分かったことや気付いたことを共有する。 ・絵を描く会で、群馬の特色やよさを絵画として表現する。	・２回目の交流ということもあり、落ち着いていた。 ・群馬の魅力について、グループごとに一人ずつ写真やイラストを見せながら、紹介を行った。 ・群馬と嘉義について比べることで、共通点や相違点、歴史的なつながりについて気付くことができた。	総合 社会 図工
融合	11月	・テーマ学習を終えて、共有したことを基に世界に訴えるメッセージを作成する。 ・メッセージを基に壁画のデザインを考え制作する。	・グループごとに意見を出し合い、まとめることで、この協働学習の意義や価値に気付くことができた。 ・お互いの「地域のたからもの」を大切にしていきたいという思いをもつことができた。	総合 図工
創造	12月	・一人一人が彩色しながら壁画を制作する。 ・今までの英語学習の成果を生かし、パートナーに手紙を書く。	・絵を描く会で制作した絵画の要素が多数入っているため、興味をもって取り組むことができた。 ・全員が彩色することで、一人一人の思いを込めることができた。	図工 英語
評価	１～３月	・完成した壁画を鑑賞する。 ・１年間の学習をふり返る。 ・社会科の単元「世界の未来と日本の役割」と関連させ、学習を行う。	・壁画に描かれている内容や全体の構図、彩色方法の相違点や類似点に気付くことができた。特に、文化や伝統の違いを実感した。	図工 社会 総合

4 成果と課題

(1) 成果

下記の児童の感想などから、各教科で関わりを持たせながらESDの視点で活動を行うことで、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養い、地域を愛し地域の発展のために力を尽くそうとする児童の育成を図ることができた。

- お互いの地域を紹介し合い、比べることで、自分たちの暮らしている地域の特色やよさを再認識することができた。
- 群馬のことだけではなく、嘉義にも守るべき大切なものがあることを知ることができた。また、力を合わせて世界のたからものを未来に伝えていかなければならないという思いをもった。
- 国や地域には、それぞれの特色やよさがあり、大切にしていかなければならないという思いをもった。今後は、違う国の子どもたちとも交流して、いろいろなことを学びたい。
- 学習全体を通して、自分と友達の意見を比べて考えることや計画を立てて課題解決をしていくことのよさに気付くことができた。また、クラスやグループで対話をしながら意見をまとめ、相手に伝えることで、お互いの地域のよさを見つけることができた。

(2) 課題

ESDに関連する学習素材は、発展的な学習が可能となる。本校には「ミリアム・ヘールちゃん（青い目の人形）」が職員玄関のガラスケースの中に保存されている。養蚕の発展にも貢献した渋沢栄一が日米の人形交換を行った交流の仲介者であったことが分かっている。この素材を基に発展的に学習することで、さらに社会や世界との接点を持ち、多様な人々とつながりを意識しながら学ぶことができる。

5 実践するときの留意点

①地域や子どもたちの実態、学校の教育目標を基に、総合的な学習の時間の目標を設定し、身に付けさせたい資質・能力を明らかにすること

②ESDの視点を取り入れ、学習内容を再構成し、各教科間の関連を明確にすること

〈参考文献〉

・『高山社学ティーチャーズガイド１』藤岡市教育研究所・高山社学研究班、2014年
・『高山社学ティーチャーズガイド２』藤岡市教育研究所・高山社学研究班、2015年
・山崎保寿編『「社会に開かれた教育課程」を実現する教育環境』静岡学術出版、2018年
・山崎保寿『「社会に開かれた教育課程」のカリキュラム・マネジメント』学事出版、2018年